

## 相中留恩記略

ふくはら・たかみね

はせがわ・せつてい

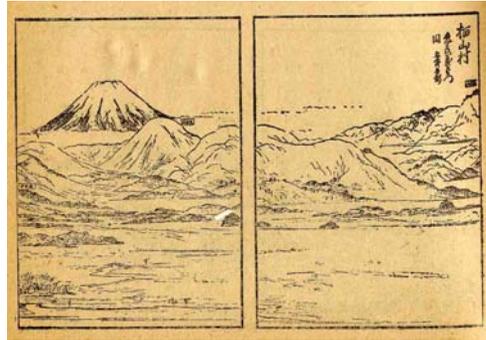
作者: 福原高峯(1792-1868) 長谷川雪堤(1819-1882)

成立: 天保10年(1839)



## 解題

相模国(一部武蔵国を含む)の名所旧跡のうち、徳川家康由来の事績を記録した図会形式の地誌。江戸後期の成立。『新編相模国風土記稿』の姉妹編ともいえる、本県地域史を知る上で欠かせない史料とされている。



(翻刻本)『相中留恩記略』神奈川県郷土研究会  
栢山村挿絵

## Keyword

- 相模国
- 徳川家康
- 「新編相模国風土記稿」
- 福原高行
- 昌平坂学問所
- 間宮士信
- 林述斎
- 「留恩永宝」
- 民撰地誌

## ■ 成立経緯

作者・福原高峯が本書編纂を思い立ったのは、文政10年(1827)春とされている。泰平の治世をもたらした大神君(徳川家康)への報恩の念から、その事績を記録しようとした父高行の思いを受け継いだものである。しかし、官撰地誌が主流の時代にあって、民(私)撰での編纂は容易なことではなく、高峯も「障る事のみ多くして成功すべくもあらざりしに」と述べている。にもかかわらず、これが成功した背景には、幕府による地誌編纂事業がある。

享和3年(1803)江戸幕府の地誌編纂の内命により、日本地誌の収集・編纂が緒についた。これによって編纂された代表的な地誌が『新編武蔵風土記稿』『新編相模国風土記稿』(#22・23 以下『風土記稿』)である。本書の編纂は、ちょうどこの『風土記稿』編纂時期と重なる。

幕府の地誌編纂事業を担っていた昌平坂学問所地誌調所の官吏は、この編纂のために各地の巡察を行っている。高峯は、これに協力し間宮士信(まみや・ことのぶ)らの知遇を得る。そして、文政12年(1829)には昌平坂学問所の大学頭・林述斎(はやし・じゅっさい)門下となる。また、この縁で画家長谷川雪堤による図会作成の協力も取り付けて、本書が成ったのである。

本書の編纂過程を知る手がかりとして、長谷川雪堤(または雪旦)の手記が残されている(神習文庫)。手記については後に述べるが、これによると高峯と雪堤は3回(天保5、7、9年)にわたり相模国を写生旅行している。このときの手形が林門下のものであったと記録されていることからみても、昌平坂学問所の援助が相当にあったと推測される。

調査開始から12年の歳月を経て、天保10年(1839)春に完成のはこびとなった本書は、林述斎により『相中留恩記略』と命名され、浄書本25冊(この時点では全25冊である。26冊目にあたる附録は後に追加)が昌平坂学問所に献上された。高峯はこの業績により、銀7枚を下賜され、熨斗目(のしめ)着用を許された用心格となった。この褒賞に関わる文書などをまとめ卷子にしたものが『留恩永宝』として残されており(藤沢市文書館)、成島司直や林復斎ら昌平坂学問所の文官が序文等を寄せていることがわかる。

江戸期の民撰地誌として特筆すべき本書は、民撰とはいえ幕府の地誌編纂事業(官撰地誌)という後ろ盾があり、また、それを巧みに利用することによって成功したものといえる。

## ■ 作 者

鎌倉郡渡内村(現・藤沢市渡内)の福原家には、高峯自撰の「福原家系譜」が伝わっている。これによると、福原家は元は平姓の三浦一族で三浦郡に居住していた。先祖は佐原八郎為連とされ、為連の子が母方の福原姓を名乗ったものようである。その後、応永23年(1416)上杉氏憲禅秀の乱のとき渡内村に移住し、北条家、徳川家に仕えて名主となり、以後代々当地の名主を務める旧家である。福原家と徳川家康との関係は、天正18年(1590)小田原城落城後、家康が玉縄近辺を巡見した際に、福原家十代重種が案内をしたことに始まると、本書「名主左平太」の項(第18巻)に記述されている。

挿絵を手がけた長谷川雪堤は、江戸町絵師で『調布玉川惣画図』の作者としても知られる。父は唐津藩御用絵師であり『江戸名所図会』でも有名な長谷川雪旦である。雪旦は長谷川等伯の画風に親しみ長谷川を名乗ったが、その流派に属したものではない。また、後には法眼(ほうげん)にも叙せられ、高い名声を誇った。この父雪旦のもとでその影響を大きく受けた雪堤が本書の挿絵の作者とされているが、雪旦とする説もあり、いずれも決め手となる根拠が見出されていない。『藤沢市文化財調査報告書34』では写生旅行に動向し下絵を描いたのは雪堤で、それをもとに雪旦あるいは工房の者たちの協力によって作成されたのではないかと推察されている。

## ■ 内 容

相模国を中心に西は箱根から東は金沢文庫までをたどり、各名所旧跡について、徳川家康との関係を中心に記述している。本書の編纂意図からも推察できるように、内容は家康の事績に偏向しており、また、記述の項目は整理・統一された形式にはなっていない。同時期の官撰地誌である『新編相模国風土記稿』と比較すると、網羅性の点では遠く及ばないが、家康に関連する事柄を中心に、『風土記稿』には見られない記述も見られる。また、家康の発給文書など近世初期の文書や旧家の系譜も記載されており、歴史書的な要素も含んでいる。これらのことから、高峯が、一方で編纂の進む『風土記稿』の存在も考慮しつつ、家康への報恩という明確な方針のもとで地誌という形式にとらわれずに編纂したものと考えられる。

## ■ 諸 本

本書は、明治17年(1884)内務省地理局編纂の『地誌目録』に掲載されている。したがってその存在は一部では認識されていたと考えられるが、後の『国書解題』には掲載がなく、本県地域史料としても長く注目されるにいたらなかった。

この史料が注目され調査が開始される経緯は、関靖「神奈川県郷土志料『相中留恩記略』の発見の由来とその解説」に詳しい。これによれば、関が本書の存在を知ったのは昭和7、8年頃で、本格的に調査が開始されるのは昭和12年(1937)のことである。その後、『郷土神奈川』への一部翻刻掲載(福原家本)、神奈川県立図書館の展示(1956)等により、郷土史料として知られるところとなった。昭和42年(1967)には相中留恩記略刊行会により影印本および校注編が刊行され、現在では多く引用されるなど、江戸期の相模国内の様子を知る上で欠かせない史料となっている。

現在確認されている写本は、昌平坂学問所献上の内閣文庫本、尾張徳川家献上の徳川林政史研究書本(旧蓬左文庫)、熊本藩主細川家献上の永世文庫本(26冊)、国立国会図書館本及び原本とされる福原家本(藤沢市文書館 藤沢市指定文化財 26冊)の5組である。

天保10年(もしくは9年後半)に完成した本書は、天保10年(1839)5月に全25冊が浄書され昌平坂学問所に献上された。2年後の天保12年尾張徳川家に所望され第2回の浄書が行われた。この時の目録が前述の手記に残されているものである。次いで安政3年(1856)には、相模・武蔵両国の預所支配となった熊本藩細川家の求めによる第3回浄書が行われ、新に三浦郡の御陣屋と御台場を書いた附録を含む26冊が献上された。このとき、福原家所蔵の原本にも附録が加えられたため、現在伝わるもののうち永世文庫本および福原家本は26冊となっている。昭和42年に刊行された複製および校注編は附録および序の一節を除き徳川林政史研究所本を底本にしている(序の一節および附録は福原家本)。

## 長谷川雪堤の手記

本書編纂の過程を知る史料として、長谷川雪堤・雪旦の手記が残されている。この手記は『相中留恩記略』本文(挿絵がなく下書きと考えられる)、手扣(てびかえ)2帖、第2回絵旅日記、浄書目録からなり、このうち第2回絵旅日記全文は『浮世絵界』第5巻9号(1940年)に掲載された。また『神奈川文化』昭和15年8月号及び9・10・11月号でも一部が紹介されている。手記の筆者については、上掲『神奈川文化』で木村捨三と関靖がそれぞれ詳細に検証しているが、雪堤、雪旦いずれの手になるものか決定的な決め手は見出せないようである。

手扣の内容は、福原家から長谷川家への到来物、両者の往復、画料の收受、本書編纂の進行状況などが記載され、編纂の過程をよく伝えているとされる。第1、3回の写生旅行日程も、これにより確認されている。浄書目録は天保12年(1841)尾張徳川家より所望されて第2回の浄書をおこなった時の目録である。

いずれも、本書編纂の過程を研究する上で欠かせない史料であるが、『神奈川文化』に掲載された一部を除き、入手は困難である。



### 構成

- 序・凡例 1巻
- 目録 1巻
- 巻之1 足柄上郡
- 巻之2～4 足柄下郡之1～3
- 巻之5 淘綾郡
- 巻之6～9 大住郡之1～4
- 巻之10～11 愛甲郡之1～2
- 巻之12 津久井県
- 巻之13 高座郡
- 巻之14～19 鎌倉郡之1～6
- 巻之20～22 三浦郡之1～3
- 巻之23 金沢郡
- 附録 1巻(福原家本、永世文庫本)



### 史料本文を読む

#### <影印本>

- 『相中留恩記略 全』 相中留恩記略刊行会編 有隣堂 1967 [K291/98/1]

#### <翻刻本>

- 『相中留恩記略 全 校注編』 相中留恩記略刊行会編 有隣堂 1967

[K291/98/2]

- ◆「郷土神奈川」神奈川県郷土研究会 1942-1943 [K05/1]  
※昭和17年～19年の各号附録として翻刻が刊行された。「相中留恩記略全 校注編」(有隣堂)の解説(石井光太郎)によれば、これに掲載されたのは巻之七、大住郡の一部までとなっている。附録という形で掲載されたためか、神奈川県立図書館所蔵の「郷土神奈川」にはその一部しか含まれておらず、序および足柄上郡、下郡の一部が確認できるのみである。



## 史料についてさらに知る－参考文献－

### <成立経緯、書誌的来歴>

- ◆関靖「神奈川県郷土志料『相中留恩記略』の発見の由来とその解説」  
(1)(2) (『神奈川文化』(1)(2) 神奈川県文化研究会 1940 [K05/2/1～2])
- ◆木村捨三「『相中留恩記略』の挿絵画家長谷川雪旦の手記」(『神奈川文化』(7) 神奈川県文化研究会 1940 [K05/2/7])
- ◆関靖「『相中留恩記略』に関する手記の発見とその筆者に就いて」(『神奈川文化』(8) 神奈川県文化研究会 1940 [K05/2/8])
- ◆「相中留恩記略」(『藤沢の文化財5』服部清道編 藤沢市教育委員会 1961 [K06.52/2/5])
- ◆石井光太郎「解説－高峯と雪堤と－」(『相中留恩記略 全 校注編』相中留恩記刊行会 1967 [K291/98/2])
- ◆「相中留恩記略」(『藤沢市史7』藤沢市 1980 [K21.52/6/7])
- 『描かれた相模「相中留恩記略」展』藤沢市図書館 1986 [K291.52/23]

### <作者について>

- \*「長谷川雪旦の旅日記」(『浮世絵界』vol.5(9) 浮世絵同好会 1940)
- ◆「藤沢の人物 福原高峰」(『藤沢市史5 通史編2』藤沢市 1974 [K21.52/6/5])
- 『江戸の絵師雪旦・雪堤』東京都江戸東京博物館 1997 [721.02/21]

### <内容について>

- ◆菅根幸裕「地誌としての『相中留恩記略』－『新編相模国風土記稿』との比較を通じて－」(『神奈川県立歴史博物館総合研究報告 1999』神奈川県立歴史博物館 1999 [K06/110/99])
- 『藤沢市文化財調査報告書34』藤沢市教育委員会 1999 [K06.52/1/34]
- \*斉藤智美「『相中留恩記略』の成立と内容の特徴について」(『風俗史学』vol.29 風俗史学会 2005)